

ゴージャスお宝鑑定家〜「う〜ん、  
ゴージャス！」「10

---

オープニングシーン：剛田質店の日常

（所要時間：約20分）

【舞台は豪華絢爛な剛田質店。壁一面にきらびやかな品々が並び、天井には巨大なシャインデリアが輝く。白金が掃除をしながら嘆いている。】

白金（ホウキを持ちながら）

「毎日毎日こんな金ピカの部屋で過ごしてたら、目がおかしくなる……!!」

【棚にある「ダイヤモンド製のハンマー」を見つけ、驚く。】

白金（ため息混じりに）

「これ、絶対叩けないですよね……。そもそも質屋ってこんな品物置くところでしたっけ？」

【奥の部屋から、剛田が金の刺繍入りのローブをまとい、優雅に登場。片手にはティーカップを持っている。】

剛田（深い声で）

「白金君、今日も素晴らしい朝だね。掃除の仕上がりも、ゴージャスさを際立たせている。」

白金（苦笑いしながら）

「いや、普通のモップがけですけど……。」

【剛田が壁に飾られた「金箔フレームの鏡」に映る自分を見つめ、満足げに頷く。】

剛田（鏡越しに）

「優雅な佇まい。それこそがゴージャスの基本だ。」

白金（困惑しながら）

「優雅すぎて現実感ないんですよ、店長  
……。」

【そのとき、店の扉が勢いよく開き、大きな音が響く。】

白金（驚いて）

「うわっ！何事ですか！？」

【お客様が布で覆われた巨大な物体を押し  
ながら登場。布の隙間から金属の光沢が見  
える。】

お客様（大声で）

「こんにちは！最高にゴージャスな品を持って  
きましたよ！」

---

シーン2：青銅製のピアノの登場

（所要時間：約25分）

【剛田が布の前に立ち、優雅に手を伸ばす。】

剛田（低く響く声で）

「これは……何やら気品を感じる。白金君、布を取るのだ。」

白金（戸惑いながら）

「えっ、僕が？店長がやったほうがゴージャスに見えますよ！」

剛田（微笑みながら）

「うむ、確かにその通りだ。」

【剛田が布を取り去ると、青銅製の巨大なピアノが現れる。店内のライトに反射し、独特な青い輝きが放たれる。】

白金（絶句して）

「な、なんですかこれ！？ただの青銅の塊じゃないですか！」

お客様（胸を張って）

「いえいえ、これは青銅でできたピアノです！  
古代技術を駆使して作られた芸術品で、し  
かも弾けます！」

剛田（鍵盤に手を置きながら）

「これは……ただのピアノではない。この青銅  
の輝き、その冷たさ、その重厚感……ゴージャ  
ス！」

白金（呆れて）

「いやいや、冷たいとか重たいとか、褒め言葉  
になってませんよ！」

【剛田が一音だけ鍵盤を押してみる。】

剛田（音を聴きながら、うっとり）

「……まるで大地の魂が語りかけてくるよう  
だ。」

白金（驚きながら）

「いや、それただの『ト』ですよね！？普通の音じゃないですか！」

【お客様が急にピアノを弾き始める。しかし、音程は少し狂っている。】

白金（耳を塞ぎながら）

「これ、調律されてないですよね！？むしろ、どこか壊れてるんじゃない……！」

お客様（汗をかきながら）

「ちよっと古いだけです！音色そのものは素晴らしいんですよ！」

【剛田が立ち上がり、お客様の隣に座る。】

剛田

「音楽とは、ゴージャスの真髄を表現するものだ。私がこのピアノの本質を確かめよう。」

【剛田が優雅にピアノを弾き始める。店内に低音が響き、次第にメロディが流れ始める

と、その音の重厚感に白金も引き込まれる。】

### シーン3：感動の演奏

（所要時間：約20分）

【剛田が青銅ピアノの前で演奏を続ける。鍵盤を叩く手は優雅だが、ピアノが重厚すぎて、次第に剛田の額に汗が浮かび始める。】

白金（少し心配そうに）

「店長、無理しないほうがいいですよ。なんか顔、すごく赤くなってきてますし……！」

剛田（息を切らしながら）

「白金君、これは優雅の代償だ……！！ゴージャスを極める者には、この程度の労苦はつきものだ。」

白金（ぼそっと）

「いやいや、ただの重労働に見えますけど……。」

【演奏が終わると、店内は静寂に包まれる。  
剛田が鍵盤から手を離し、ゆっくり立ち上がる。観客のように見守っていたお客様が感動して拍手をする。】

お客様（涙を拭いながら）

「すごい……この音色、そして店主の熱演  
……！人生で聴いた演奏の中で、最高のひとつです！」

【剛田は汗だくになりながらも、胸を張り、優雅に一礼する。】

剛田（微笑みながら、疲れを隠す声で）

「ありがとう。この青銅ピアノの音色が、君の心に届いたなら、それこそが……ゴージャス！」

白金（横でツツコミながら）

「届いたのはいいですけど、店長の汗もダラダラ届いてますよ！ほら、汗が床に垂れてます！」

剛田（ハンカチで汗を拭いながら）

「ふっ……汗ではない、これは努力の証。優雅の雫だ。」

白金（ジト目で）

「いやいや、ただの汗ですって。それに演奏しながら肩震えてましたよね？相当キツかったでしょ……」

剛田（冷静に装いながら）

「ピアノが重厚であるほど、音色に重みが増す。それに比例して、演奏者も真価を試されるのだ。」

白金（呆れ顔で）

「そんなこと言ってる場合じゃないですよ。演奏終わったら、ちゃんと水分補給してください……」

【白金がペットボトルの水を差し出すが、剛田はそれを断り、代わりに豪華な金のティーカップに注いだ紅茶を手取る。】

剛田（紅茶を一口飲み、気を取り直して）

「ゴージャスたるもの、潤いも優雅であるべきだ。」

白金（小声で）

「……いや、完全にポーズ取って休憩してるだけじゃないですか。」

【剛田が深々と息を吸い、再び堂々と立ち上がる。】

剛田（声を張りながら）

「さて、この青銅ピアノが持つポテンシャルは、十分に示された。次は買取価格を決める番だ。」

【白金は呆れつつも、その姿に少し感心した様子で見つめる。】

白金（ぼそっと）

「店長、こういう無茶するところだけは、ちょっと尊敬しますけどね。」

シーン④：価格交渉とエンディング

(所要時間：約20分)

お客様(期待の眼差しで)

「それで、このピアノ、いくらで買い取っていた  
だけますか？」

剛田(しばらく考え、堂々と)

「この青銅ピアノの価値は……600万円だ。」

白金(声を裏返しながら)

「600万！？そんな値段、普通の質屋じゃ聞  
いたことないですよ！」

剛田(冷静に)

「普通ではない。それがゴージャスたる証だ。」

お客様(感動しながら)

「ありがとうございます……このピアノがここに  
置かれるなんて、本当に嬉しいです！」

【ピアノが店の中央に飾られ、剛田がその前で満足げに立つ。】

白金（小声で）

「……これ、売れるんでしょうか。」

剛田（優雅に微笑んで）

「売れるかどうかは重要ではない。これが、この店の魂だ。」

【クラシック音楽が流れる中、剛田が再びピアノに手を置き、一音だけ鳴らす。その音が響き渡り、幕が下りる。】

### 各シーンのポイントと解説

---

シーン：オープニング（剛田質店の日常）

所要時間：約20分

## ポイント

- キャラクターの個性を明確に提示…
  - 剛田の「優雅でゴージャス」な性格と言動を強調。ローブや金刺繍、ティーカップなど、非現実的なまでの豪華さをアピール。
  - 白金の「普通人らしいツツコミ」役割を明確にし、観客が共感できる存在として配置。
- 質店の異常さをコメディタッチで描写…
  - 「ダイヤモンドのハンマー」など非実用的な品物で店の雰囲気を一モラスに。
    - 店内の装飾や剛田の振る舞いで、観客に「普通じゃない質屋」を印象付ける。
- 物語のフックを提示…

- 青銅ピアノが布に包まれて登場する  
という不穏な空気を作り、観客の興味を引く。
- 

## シーン2: 青銅製のピアノの登場

所要時間: 約25分

ポイント 青銅ピアノという「突飛なアイテム」  
で笑いを誘発…

- 青銅でピアノを作るというあり得ない設定が、すでにコメディの核。
- 重たさや音の狂いをネタに、白金の冷静なツツコミで笑いを強化。
- ・ 剛田の「ゴージャス論」が炸裂…
  - 鍵盤に触れただけで「ゴージャス！」と評価する剛田の過剰な反応が笑いどころ。

- 一音で感動する剛田と、それを冷静に否定する白金の掛け合いがテンポを作る。

- お客様のキャラクター性も追加…

- 必死にピアノを売り込もうとするお客様の言動が、シーン全体をさらに賑やかに。

---

### シーン3：感動の演奏と汗だくの剛田

所要時間：約20分

ポイント 剛田の演奏シーンでギャップを生む：

- 演奏そのものは感動的で観客を引き込むが、剛田の額に浮かぶ汗が視覚的な笑いを誘発。

- 演奏後に疲労困憊しながらも「優雅」を貫こうとする剛田の姿がコメディの真骨頂。

- ・ 白金のリアクションで現実的な視点を

追加…

- 「ただの汗」「肩震えてた」など、剛田の言い訳を軽快に突っ込むことで笑いを倍増。

- 剛田の「優雅の雫」発言など、過剰な美学への反応でテンポを調整。

- ・ 感動と笑いのバランスを取る…

- 剛田の演奏が生む感動的な雰囲気と、彼の無理をする姿のギャップで観客を引きつける。

- 演奏の音色そのものがゴージャスであることを強調し、物語の核心に繋げる。

## シーン④：価格交渉とエンディング

所要時間：約20分

ポイント 剛田の豪快な買取価格で笑いを誘

発：

- 900万円という突拍子もない価格設定がコメディのピークに。
- 白金のツツコミで、観客の「その値段はおかしい」という共感を引き出す。

・ お客様の反応で明るい雰囲気をつくる：

- 感動のままに満足するお客様を描き、観客も安心して笑える結末に。

・ 剛田の美学で締める：

- 「売れるかどうかではない」というセリフで剛田の哲学を改めて示し、キャラクター性を強化。

○ 最後にピアノを弾く「一音」の静寂で、物語を優雅に締める。

---